

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870098

研究課題名(和文) 多文化主義オーストラリアにおけるマイノリティの包摂とアンザック・デイ

研究課題名(英文) The incorporation of minority groups into Anzac Day in multicultural Australia

## 研究代表者

津田 博司 (TSUDA, Hiroshi)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：30599387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は1980年代以降の多文化主義オーストラリアを対象として、帝国主義時代の戦争の記憶が現在もなお、ナショナル・アイデンティティにおいて重要な位置を占めている背景を検証した。文献史料とフィールドワークを併用した知見からは、多文化社会におけるアンザック・デイが、多様な非イギリス系マイノリティを取り込むことで、包摂的なナショナリズムの象徴へと変容する過程が跡づけられた。しかし同時に、そうしたアンザック神話の「多文化主義化」の結果、先住民に対する「フロンティア戦争」などの植民地時代の歴史をめぐる議論が生じ、先住民と非先住民との軋轢を前景化させていることもまた、明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This project, focusing on multicultural Australia since the 1980s, examined the background in which the commemoration of imperialist wars still occupies a significant place for Australian national identity. With the outcome of documentary research and fieldwork, this project traced the transformation of Anzac Day as a symbol of 'inclusive' nationalism through the incorporation of diverse non-British minority groups in the multicultural society. It is also demonstrated, however, that the 'multiculturalization' of Anzac tradition has brought the debate over colonial history, such as the 'frontier wars' against the indigenous people, and foregrounded the conflict between indigenous and non-indigenous populations.

研究分野：イギリス帝国史

キーワード：オーストラリア 多文化主義 アンザック マイノリティ 記憶

## 1. 研究開始当初の背景

現在のオーストラリアでは、第1次世界大戦中の1915年に行われたガリポリ半島上陸作戦に起源をもつアンザック・デイ(4月25日、オーストラリアとニュージーランドの志願兵によって編成されたAustralian and New Zealand Army Corps (ANZAC)に由来)が、ナショナル・アイデンティティと深く結びついた記念日として、国家的な顕彰の対象となっている。オーストラリアは、「多文化主義(multiculturalism)」の用語を生み出したカナダと並び、世界に先がけて多文化主義を国策として導入した国家として、様々な学問分野から注目を集めているが(関根政美『多文化主義社会の到来』朝日選書、2000年など)、先進的な多文化社会における国民統合には、じつは帝国主義戦争の記憶(および第1次世界大戦の経験を国民国家の「誕生」とする歴史観)が大きな役割を果たしている。

研究代表者は過去の研究を通じて、「帝国の総力戦」として戦われた二つの世界大戦の記憶が、大戦間期以降のオーストラリアのナショナリズムに及ぼした影響を検証した(津田博司『戦争の記憶とイギリス帝国 - オーストラリア、カナダにおける植民地ナショナリズム』刀水書房、2012年)。そこでは、アンザック神話と呼ばれる戦争体験の物語が、イギリス帝国の植民地時代には帝国規模の連帯感(とくに白豪主義と結びついた人種的優越性)を支える装置となり、1960・70年代に進行する脱植民地化を経てもなお、その歴史的文脈を急速に読み替えられることで、ナショナル・アイデンティティの中核として機能し続けたことが明らかとなった。とくに重要なのは、ベトナム戦争期の反戦運動において、植民地主義や軍国主義といった旧来の価値観が批判にさらされるなかであっても、アンザック・デイが「祖国のための自己犠牲」や「自由と民主主義の防衛」を象徴する記念日として再解釈されることで、むしろ多文化主義に適合的なナショナリズムを生み出す転機となった点である。

ここで焦点となる多文化主義下のアンザック神話については、キリスト教に代わる世俗的な「市民宗教(civil religion)」という性格が指摘されているものの(K.S. Inglis, *Sacred Places: War Memorials in the Australian Landscape*, third edition, Carlton, 2008)、20世紀末から現在にかけてのアンザック・デイに関する歴史学的な実証研究は、国内外において未だ開拓の途上にある。こうした先行研究で残された課題の存在が、本研究課題の着想の発端となった。

## 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、上記の歴史的連続性を念頭に置きながら、多文化主義が実際に定着していく1980年代以降のアンザック・デ

イを対象に設定し、オーストラリアにおける多文化主義の進展と戦争の記憶に根ざすナショナリズムの変容との相互関係を明らかにすることにあつた。とくに重要な論点は、多文化社会において(「同化」とは異なるかたちでの)包摂が求められる非イギリス系マイノリティの人々が、支配的なアンザックの伝統にどのように参画し、そのことが既存のナショナリズムにどのような影響をもたらしているのか、という問いである。

本研究課題は、研究代表者が過去の研究で描き出した旧イギリス帝国時代からのナショナリズムの構造転換を前提として、オーストラリアにおける多文化主義とアンザック神話との関係性の解明を試みた。アンザック・デイという題材は、1980年代のラディカル・フェミニズム、先住民への抑圧をめぐる1990・2000年代の歴史論争、2010年代現在における政治的公正と伝統的なナショナリズムの緊張関係といった、マイノリティをめぐる多様なテーマを横断的に論じることを可能にする。こうした変遷が現在進行形で進んでいる事象であることに鑑み、本研究課題では、歴史学的な文献史料と社会学・人類学的なフィールドワークによる分析を有機的に結びつけることによって、新たな歴史研究の手法の確立を目指した。

西洋史学の領域では、かねてからオーラル・ヒストリーなどの新規的な研究手法に対する関心が高まっているが(西洋史研究者が書評などで言及したオーストラリア研究の一例として、保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー - オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、2004年)、本研究課題において用いられた手法は、そうした流れを具体化するものである。イギリス帝国史の分野で培った文献史料による分析に基礎を置きながら、社会学や人類学の分野で成果を上げているフィールドワークの手法を積極的に導入し、「現在史」として生産される歴史のありようをより実態に即したかたちで実証することが、研究開始時点における本研究課題の意図であつた。

## 3. 研究の方法

本研究課題は平成25~27年の各年度に対応させたかたちで、1980年代以降のアンザック・デイを三つの段階に区分して、研究を進めた。それぞれの時期区分および各段階における論点は、次の通りである。

### 第1期(1980年代):

アンザック神話に対するフェミニストの批判とメディアにおける反応(先鋭的なフェミニズムによって、アンザック神話の白豪主義的性格が「発見」される)

### 第2期(1990・2000年代):

民族的マイノリティによる戦争貢献の再評価と先住民問題(アンザックの伝統が民

族的マイノリティを射程に収める一方、結果として戦争の記憶による包摂・軋轢の構図が複雑化する)

第3期(2010年代):

ガリポリ上陸100周年とアンザック・デイの「多文化主義化」をめぐる論争(アンザックが象徴する既存のナショナリズムと多文化主義の両立が問題化する)

こうした区分によって、オーストラリアで多文化主義が定着するにつれて、既存のナショナリズムの象徴であるアンザックの伝統に対して、様々なマイノリティが(ジェンダーやエスニシティ、植民地時代の過去の清算といった問題を交錯させながら)参画を試みる過程の検証が可能となった。以下、それぞれの年度における活動の概要を述べる。

平成25年度は、1980年代のアンザック・デイに焦点を定めて、フェミニスト団体Women Against Rape(WAR)による抗議活動の分析に取り組んだ。その一環として、8月13日から31日にかけて、オーストラリアでの現地調査を実施した。分析の史料としては、メルボルン大学図書館、オーストラリア国立図書館、ニューサウスウェールズ州立図書館で史料調査を行うとともに、WARの元メンバーからの聞き取りおよび個人的に提供を受けた内部史料を併用することによって、より精度の高い情報の補完を試みた。また、フィールドワークによる知見に基づく研究手法を精緻化するため、本研究課題の基礎的な手法についての学会発表を行った。

平成26年度は、1990年代以降のアンザック・デイを対象に、民族的マイノリティによる「参画」の実態を明らかにするべく、シドニーのレッドファーン地区で行われている先住民による追悼式典などを対象として、オーストラリアでの現地調査に取り組んだ。対象となる時期のうち、まさに現在進行形の事象については、4月23日から27日にかけて、シドニーでのアンザック・デイのフィールドワークを実施し、文献史料を用いた長期的な視点による補完として、8月9日から24日にかけて、オーストラリア国立図書館およびニューサウスウェールズ州立図書館での史料調査を行った。

平成27年度は、これまでの研究を結論づける題材として、2015年のガリポリ上陸100周年記念事業を取り上げ、多文化社会におけるアンザック・デイのありようについて検証した。このためのフィールドワークとして、4月23日から27日にかけて、最も大規模な記念事業が行われたシドニーで実態調査を実施し、そこでの分析に対する文献史料による補完として、8月8日から29日にかけて、オーストラリア国立図書館およびニューサウスウェールズ州立図書館での史料調査を行った。また、本研究課題で得られた知見について学際的な視点から検討するため、関連分野である歴史学および地域研究の国内主

要学会(日本西洋史学会、オーストラリア学会)において、学会発表を行った。

#### 4. 研究成果

本研究課題で得られた知見を、前述した三つの時期区分に対応して時系列順に整理すると、次のようになる。

女性の人権擁護や性暴力撤廃を訴える政治団体であったWARは、1980年代半ばから、アンザック・デイに抗議活動を行うようになった。WARのフェミニストは、アンザックの伝統のなかにマスキュリニティとの結びつきを見出し、「戦没者追悼」や「国民国家の誕生」といった言説に隠された、軍国主義・白豪主義的イデオロギーの残存を指摘した。このような主張は、現在のオーストラリアで一部の歴史家が提起している「オーストラリア史の軍事化」をめぐる議論を、大きく先取りするものである(Marilyn Lake and Henry Reynolds (eds.), *What's Wrong with Anzac?: The Militarisation of Australian History*, Sydney, 2010)。WARの内部史料からは、当時の先住民運動との連帯を意識したような言説も確認できた。しかし、当時のメディアにおいては、退役軍人会や警察との衝突が起こった場合を除いて、WARによる主張の内容が詳細に報じられることはなく、その運動は結果として一過性のものに終わった。1980年代は先行研究において、アンザック・デイがベトナム戦争期に生じた停滞を脱し、映画『誓い(Gallipoli)』の成功などの要因によって、現在の隆盛へと向かっていく転機であったとされる。本研究課題での分析からは、その隆盛をもたらした背景として、マイノリティによる批判の声のすみやかな「忘却」があったことが示された。

1990年代における多文化主義の進展とは対照的に、アンザック・デイは長らく、その担い手や戦没者表象において、非イギリス系マイノリティが周縁化された状況が続いてきた。しかし、21世紀に入ると、メディアにおける非イギリス系への言及がしだいに増加し、シドニーのレッドファーン地区における式典が示すように、先住民を始めとするマイノリティが、独自の運動を展開するようになる。そこでは、自らの先祖もまたイギリス系と同じ「英雄」であるという認識の下、「黒いアンザック」と呼ばれる先住民兵士が経験した差別などを通して、現在の先住民問題の背景ともなっている人種主義を糾弾する言説が確認できた。こうした動きは、人種主義に対する批判という点では、1980年代のフェミニスト団体と共通する反面、アンザックの伝統にむしる積極的に与するという点で、決定的な相違点を有している。これらの分析からは、マイノリティをめぐる言説構造の変化とそれに対するマジョリティの反応が、重要な課題として抽出できた。

現在活発化している第1次世界大戦100周

年の記念事業からは、先住民兵士を始めとする多様な文化的背景をもつ人々による戦争貢献が強調され、現在の多文化主義と調和的な戦没者表象が広がっている様相が確認できた。シドニーおよびキャンベラにおける先住民による式典の分析によって、祖国のために戦ったアンザック兵士の記憶がさかんに顕彰される反面、かつてイギリスによる植民地化に伴う「フロンティア戦争」の犠牲となった先住民の存在が忘却されていることに対して、先住民解放運動家からの批判が生じるに至った背景が跡づけられた。キャンベラでは、2012年のアンザック・デイから、植民地化の犠牲となった先住民への認知を求める抗議活動が始まっている。第1次世界大戦を起源とするアンザック神話において、その「前史」である「フロンティア戦争」の記憶は、必然的に周縁化されていく。それはすなわち、同じ「祖国の防衛」であったとしても、入植者による侵略に立ち向かった先住民の犠牲は忘却され、入植者の子孫とともに外国での戦争を戦った先住民は英雄視されるという、歪んだ構図を生み出すことになる。これらの事例からは、アンザック神話を通じた多文化主義的ナショナリズムの高まりの結果、そこに内包されている過去の植民地主義をめぐる対立もまた同時に先鋭化するという、マイノリティの包摂と排除をめぐる両義的な展開が明らかとなった。

本研究課題が追跡してきた動向からは、白豪主義時代に生まれたアンザック神話が多様なマイノリティを取り込むことで、多文化主義的かつ包摂的な物語へと変貌しつつある様相を解明することができた。しかし、祖国のために戦った英雄の崇拝を通じた愛国心の醸成が、従軍という行為そのものを否定する反戦運動や平和主義、あるいはアンザックの伝統に反対したWARのような人々の存在を周縁化し、一面的な歴史表象を生んでいる側面も指摘できる。「フロンティア戦争」に対する評価が典型的に示すように、単に「黒いアンザック」への言及が増加しただけでは、植民地化の時代から続く先住民の苦しみへの共感が高まらない。アンザック・デイを取り巻くマイノリティの記憶が恣意的に忘却され、マジョリティのアイデンティティを支えるための演出が続けば、戦争の記憶を通じた国民統合はむしろ排他的な性格を強めることになる。こうした包摂と排除、記憶と忘却をめぐる方向性がむしろアンザック・デイの前史、すなわち植民地化の時代から続く抑圧的構造によって規定されているという、本研究課題の長期的視点に基づいた知見は、国内外の先行研究との比較において、十分な独創性と影響力を有するものと思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計 1件)

津田 博司「新自由主義時代における歴史表象と国民統合 - アンザック・デイを中心に」『オーストラリア研究』第29号、2016年、76-87頁、査読有

### 〔学会発表〕(計 3件)

津田 博司「新自由主義時代における歴史表象と国民統合 - アンザック・デイを中心に」オーストラリア学会 2015年度全国研究大会、2015年6月14日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)

津田 博司「現代オーストラリアにおける国民統合と第1次世界大戦の記念事業 非イギリス系マイノリティの包摂を中心に」日本西洋史学会第65回大会、2015年5月17日、富山大学五福キャンパス(富山県富山市)

津田 博司「現代オーストラリアにおけるアンザック・デイと先住民 歴史家は「現在」をどこまで射程に収められるか？」大阪大学西洋史学会第18回ワークショップ西洋史・大阪、2013年5月25日、大阪大学豊中キャンパス(大阪府豊中市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

津田 博司 (TSUDA, Hiroshi)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：30599387